

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Chieftainship and Land Tenure : Land, Kin and Title in the Central and Western Caroline Islands

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牛島, 巖 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003733

中央・西カロリン群島における土地・血縁・称号

牛 島 巖*

- | | |
|------------------|------------|
| I. 土地保有の主体 | Ⅲ. 夫方居住婚社会 |
| II. 妻方居住婚社会 | 1. ウリシー環礁 |
| 1. サタワル島 | 2. フェイス島 |
| 2. トラック諸島およびその離島 | 3. ヤップ島 |
| 3. ラモトレック島 | 4. ベラウ島 |
| 4. オレアイ環礁 | IV. まとめ |
| 補. マーシャル群島 | |

I. 土地保有の主体

カロリン群島の社会体制は、顕在的にしろ潜在的にしろ、母系を基調として構成されている。中央カロリンでは妻方居住婚が、西カロリンでは夫方居住婚が優越している。つまり、オレアイ環礁を境にして、中央部の母系・妻方居住婚社会と西部の母系・夫方居住婚社会に二分される。土地保有の主体に目を向けてみると、母系リネエジあるいは疑似母系リネエジが強くその機能を保持している中央部に対して、西部では疑似母系的ないし父系的屋敷集団にその機能が移行している。その間に幾つかの段階の変異が見受けられる。換言すれば、カロリン群島では、コーポレート・グループ(団体)は土地にからまる諸権利との関連で構成されていて [ALKIRE 1977: 65], この土地保有主体の構成単位には母系リネエジ, 疑似母系リネエジ, 母系的拡大家族, あるいは父系ないし母系的屋敷集団と幾つかの変異が見られる。一方で、母系リネエジが土地保有の主体であるところでは、男性成員の子供との関連が注目され、他方、土地保有の主体が父系的屋敷集団であるところでは、潜在的な母系の認知と兄弟の子供に対する姉妹およびその女子子孫の持つ権限が注目される。しかも、これらはすべて土地に対するある種の権利と関連している。

カロリン群島における土地保有団体の構成にみられる変異を考察するにあたって、

* 筑波大学歴史・人類学系

ここでは血縁、土地および称号との連結に眼を向けてみたい。血縁と土地、血縁と称号（タイトル）の連結に加えて、土地と称号との連結が、カロリン群島のそこここで認められる点が注目される。

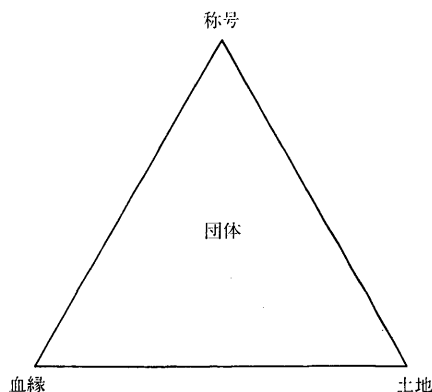


図1 土地保有団体における血縁・土地・称号の関係

1. まず、血縁と土地の概念的混融という現象が指摘できる。トラック諸島を中心とする中央カロリン群島では土地は母系リネエジによって保有され、

妻方婚的大家族によって使用されている。ここでは、土地を指し示す言葉は「食物」を意味し、一つあるいは一組の土地から採れた食物（イモと果樹）を共有する者がキンシップを共有するとみなされている [MARSHALL 1972: 87]。同じ土地で採れた食物で養育された人々が親族員として行動する。ここで肝要な点は、土地（＝食物）を共有したつながりが、血縁のつながりにまして強調されていることである。ここでは土地保有集団は母系リネエジの形態をとっているが、リネエジ成員の絶えざる増減に対応して、養取や男性成員の子供を取り込んで成員の補充をしている。つまり、土地保有団体を維持するために、親族の恒常的な改編が促されている。この種の一定の土地に連結している人々は「土地の人」などと呼ばれている。この親族の恒常的改編は、夫方居住婚を採用しているカロリン群島西部の珊瑚礁においてもみられる現象である。

また、カロリン群島では、人の移住が頻繁に行なわれたことが、氏族起源伝説などから推定できる。人がある島に移住して、そこに土地保有団体が創立されるにあたって、その基盤となるのは、特定の居住地が定められることであった。ここで注目される点は、カロリン群島の各島で特定の居住地、屋敷地がリネエジ存続の基礎として認識されていることである。母系リネエジは、特定の土地を保有し、その土地に隣接して集団成員が居住することによって編成されている。

2. 親族と称号との連結に関して見てみると、土地保有団体が母系リネエジを基調として構成されている地域にあっては、先住のクランが首長クラン層を構成し、後続のクランが平民層を構成している。基本的にはクラン内のシニヤー・リネエジの年長

者が首長職を継承していく。そして、リネエジ内の年長原理によって称号の継承順位が定められている。とはいえ、リネエジ成員の増減に対応して、養取慣行を通じて、あるいは男性成員の子供の一時的な取り込みを通じて、首長職の継承が維持されることも稀ではない。このように系譜の継承に関しても血縁以外の要素が介入する余地が生じている。

3. カロリン群島で注目されるのは、土地と称号・権限との連結である。第一の側面は、土地に対する権利の重層性との関連である。カロリン群島では、一般にある集団が土地を他の集団ないし個人に贈与した場合、その土地に対して完全に権利を委譲し、放棄したことはならない。土地の元来の保有者が、その土地を贈与ないし譲渡した後でも、その土地に対してある種の権限を留保している。この権限は残存権（内容としては最終的処分権、復帰権など）と規定される [須藤 1984: 314]。トラック諸島及び他の珊瑚島では、島に最初に移住したと伝えている首長クラスが当該地区の大部分の土地を占有していて、後続クラン、リネエジに土地を分与したと伝えている。この場合、前者が土地に対する残存権を留保し、後者が保有権（使用权）を確保する（Goodenough はトラック諸島の土地保有の分析に際して、仮の保有権（provisional rights）と残存権（residual rights）に分け、前者が土壌（soil）に対する権利で、後者は領域（territory）に対する権利という点で異なる、と述べている [GOODENOUGH 1951: 35]）。後続リネエジは首長リネエジに対して定期・不定期の貢納を象徴的に行なう。首長クランが土地に対する残存権を保持し、平民クランに使用权を与えて、前者は初物を受けとる特権を享受している。ここに見られる図式は、首長クラン：平民クラン::先住クラン：後続クラン::残存権保持者：保有権（使用权）保持者ということになる。なお、この残存権と使用权の関係は、母系リネエジと男性成員の子供との間の関係にも適応される。つまり、父から土地の使用权を得ている子供は、定期・不定期に象徴的な貢納を父の母系リネエジにしなければならない。

第2の側面は、リネエジの基礎となる土地区画（居住地）とある種の称号との連結である。これはしばしば土地区画の位付けとして現われる。特定の土地区画が他のそれよりもランクが高く評価されていて、ある特権、称号、さらには職能とさえ連結している。これらの土地は一定のクランやリネエジに固定されていて、他に委譲しない土地、「元来の土地」とみなされており、「入ってきた土地」とは区別される。夫方居住婚を採用している西カロリン群島では、やや異なる方向に発展して、特定の土地区画、屋敷を相続したり、手に入れた者が、その土地区画に付随している特権なり職能を享受する。つまり、土地保有の主体として拡大家族や屋敷集団の自立性が高まって

いるような西カロリン群島では、屋敷と特定の称号、特権が連結している。ここでは、親族に基盤を置いた人間関係が土地に基盤を置いた人間関係に転換しているかのように見える [SCHNEIDER 1984]。

4. 母系社会における父と子供との関係には種々の局面が見られるが、カロリン群島では、父から子供へのある種の土地に対する権利の委譲関係が注目される。妻方居住婚が主流の中央カロリンでは、母系集団の男性成員の子供が、潜在的な「相続者」とみなされている。父から土地区画に対する使用权を委譲された子供は、定期的に父の母系集団に初物を献上する。これは使用权を与えた集団が土地に対する残存権を留保しているからである。しかし、残存権を保持している集団の成員がいなくなると、使用权保持者が完全な権利を獲得することになる。この父の集団から彼の子供の集団への土地の権利の委譲は、結婚時に夫が妻に土地を贈与する、子供の誕生時に父が土地を子供の名義にして贈与する、離婚時に妻および子供に贈与する、養取に際して土地の贈答が行なわれるなどの、種々の機会になされる。この父の集団から彼の子供の集団への土地の贈与が制度化されている社会とそうでない社会があるが [須藤 1984: 327-331]、何れも一時的ないし恒久的な使用权の委譲であって、父の集団はこれらの土地に対する残存権を留保している。土地贈与側は、この権利の確認のための初物の献上、集団成員の葬送時における供物の献納などを受ける権利を持ち、処分権、復帰権を留保している。

これは親族名称体系にも反映して、変形クロウ・タイプを採用している処では、父の集団の成員は「チチ」「ハハ」扱いとなり、自己の集団の成員は「コドモ」扱いされる。ここでは土地に対する残存権を保有する側が「オヤ」で、使用权を保有する側は「コドモ」扱いとなる。

これらの事情は、夫方居住婚社会では異なる。ここでは女性が移動する形態をとるので、母系リネエジの成員は分散する。この女性およびその女系子孫とリネエジの基礎となる土地との関連は検討に値する。ここでは兄弟姉妹集団 (sibling set) がそれぞれ自己の集団の外に居住している。つまり、男性は父の居住地に、女性は夫の居住地に住む。母系リネエジが土地保有の主体として機能を維持しているところでは、首長に選任された男性は、自己のリネエジの基礎である居住地あるいは特定の屋敷に転居して、そこでリネエジの土地と成員を管財する。また、女性は夫の土地と自己のリネエジの土地に使用权を持ち、男性は自己のリネエジの土地を管財し使用すると共に父の土地に使用权を持つ。さて、土地保有の主体が、拡大家族または屋敷集団に替わっているところでは、父から子供への土地の使用权の相続が累積されてきて、そこに

累積的な父子関係が強調された屋敷集団が生成される。このような道筋で土地の父系相続が確立したところにおいても、姉妹およびその女系子孫の土地に対するある種の権利が無視されないうで、留保される。ヤップ島では、母系は沈潜化しているが、姉妹（及び女系子孫）は、父（兄弟）から相続した土地を使用している兄弟の子供に対して監視すると共に保護する。そして、慣習に反する行為をした兄弟の子供およびその母（兄弟の妻）を、その土地から追放する権限を持つ。

以下、トラック諸島からペラウ諸島にかけての中央・西カロリン群島の幾つかの社会を取り上げて、血縁と土地、血縁と称号ならびに土地と称号との連結について素描してみよう。

Ⅱ. 妻方居住婚社会

1. サタワル島¹⁾

サタワル島では、土地保有の主体として母系出自集団が維持されている。母系出自集団は、特定の土地を保有し、その土地に隣接して集団成員が居住することによって編成される。サタワル社会の母系出自集団は、基本的には三世代の間の女系出自成員によって編成されており、その成員の間に女性子孫がおれば、出自集団の絶滅という事態は生じない。しかし、クランが分裂し分節集団を形成し、女性後継者がいない場合、養取が優先される成員補充の方法であるが、集団の男子成員の娘を養女にする例も見られる。1つのクラン内の複数のリネエジの間には序列があり、これはリネエジの創設（分節）した時期の新旧と年齢によって決定される。つまり、より古くこの島に定住した母系子孫が優位を占め、分節集団を形成した世代においては女性キョウダイの姉の系統が妹のそれより高い地位にある。

各母系的リネエジはプコスとよばれるリネエジ成員、特に女性成員が居住している居住地区の名前によって同定される。一つの固有名（土地名）を持つプコスは、数軒の家屋と共同炊事小屋の建物群で構成される。各リネエジの名称はそれぞれのプコスの名に由来し、「プコスの人」は、そこのプコスで生まれた人を意味する。つまり、リネエジの成員であり、それに養子は含まれるが、婚入者は排除される。プコスはリネエジの成員が「足をつけた場所」で、リネエジの「本拠地」とみなせる。新しい居住地を造っても、旧居住地は「先祖が足を踏み入れた所」として記憶される。このようにリネエジは一定の名前のついた土地区画（居住地）と連結しているが、政治的地

1) 資料は須藤 [1984, 1985] によった。

位の継承は母系の原則に従う。

さて、土地保有の主体としての母系リネエジに目を向けてみると、リネエジの「元来の土地」ないし「元来の食料資源」、つまりリネエジの代々の祖先が保有してきた土地は、リネエジの全成員によって保有され、相続される。新参リネエジにあっては、先住リネエジから分与された土地がそのリネエジの「元来の土地」とみなされている。これに対して、リネエジに婚入した男性が贈与した土地に対する権利（使用権）は「贈られた土地（食料資源）」という。具体的には、リネエジの男性は彼の妻および彼らの子供に、ココヤシの木、パンの木とタロイモ田を贈ることが義務づけられている。これは男性の移動に伴って父から子供へと相続継承される。この贈与された土地に対する権利は、贈与側と受贈側との間で、残存権と使用権とに区別されている。残存権は「元来の土地」を保有してきたリネエジが、贈与した「元来の土地」に対して留保している権利であり、土地を貰ったリネエジはその土地を直接的に使用する権利を持つ。サタワル島では、それはリネエジ間を世代と共に移動していく。そのために各リネエジは自分の土地が、どのリネエジによって保有されているかを、いつでも記憶しておく必要がある。この父系ラインに沿って集団間を移動していく土地の使用権の道筋は「土地の歴史」と呼ばれ、各リネエジが世代を越えて秘密裏に伝承すべき「知識」である。この男性（父親）が子供に譲渡した土地（使用権）は、子供のリネエジが共有する土地とは明白に区別されている。

以上、サタワル島では、母系リネエジが土地保有団体として健在で、成員補充の手段として養取が採用されている。称号は島に定住した新旧と系譜の原理に従っており、土地とランクとの連結は弱く、土地区画の位付けは見られない。だが、リネエジは本拠地としてのプロコス（居住地）と結合し、「元来の土地」を母系的に相続する。他方、父の集団が彼の子供の集団へ土地を贈与することが制度化されていて、これらの土地に対する使用権は男性の移動に伴って、父から子供へと集団間を移動する。だが、これらの土地に対する残存権は沈潜していて、土地を受け取った集団が土地を贈与した集団に、毎年の初物を献上する義務はなく、そこに政治的な序列関係は顕現していない。

2. トラック諸島およびその離島²⁾

トラック周辺離島

トラック周辺離島では、養育という概念を媒介にして血縁と土地の融合がみられる。

2) 資料は Goodenough [1951], Murdock and Goodenough [1947], Marshall [1972, 1976, 1981] によった。

キョウダイ関係に枠をはめているのは土地である。換言すれば、すべてのキョウダイは土地（＝食物）を共有しているとみなされている。例えば、ナモルック環礁では、土地保有の単位は、母系リネエジ内の父母を同じくするキョウダイ（養子も含めて）に分化している。ここでは土地は「*mongo*（食物）」とよばれ、土地は生命の根源である。サブクラン・レベルで共有されている土地は、全体のわずかな部分にすぎないが、象徴的な意味で重要である。ここではキョウダイであることは、土地＝食物を共有すること、つまり生命を共有することを意味する。土地を共有することは緊密なキンシップを共有することと同義であり、サブクラン、リネエジ、ディセント・ラインのそれぞれのレベルで、母系関係者（*mongo nu chu*）は食事を共にする、換言すれば土地資源を共有する。同じ団体の成員は相互に養育し維持しあい、そして食料資源を共有する。

このように「養育」がトラック周辺離島の親族関係の本質であるので、時によっては食物（＝土地）の共有が血縁（系譜）の共有を凌駕する。リネエジの成員権に関して団体的要素と系譜的要素とが拮抗した場合、優先されるのは前者であって後者ではない。つまり、共有された土地からの食物での相互の養育関係が、系譜を共有する関係より優先される。他方において、父から子供への土地の委譲が重要で、土地委譲の総件数の78%をしめている。父が自己のリネエジの土地（＝食物）を子供に贈ることにより、父の土地から取れた食物を共食する人々は連帯する。そして、父を同じくする子供達が、リネエジの他の成員と共有する母の土地だけに依存しないで、自立する道を開く。彼らは父の母系リネエジの *co-children* であるので、その土地の潜在的な後継者とみなされている。これらの土地の贈与はリネエジ間の婚姻に基づくものであり、これはリネエジ間の連帯と連盟を強化する。

このようにトラック周辺離島では、土地の食料資源によって相互に養育されることが、親族関係の基本であって、土地の共有関係が系譜の共有関係に勝っている。

トラック諸島

ここでも、かつては、各リネエジは特定の屋敷（*jimw*）と連結していて、リネエジの *jimw* はリネエジの成員の本当の拠点で、団体としてのリネエジの外面的な表現であった。

さて、トラック諸島の各島は幾つかの地区（*district*）に分かれる。地区は通常幾つかのリネエジで構成される。草分けのリネエジが地区のすべての土地区画に対して残存権を保有し、新参のリネエジは幾つかの土地区画に使用権を保有する。それらの区画の利用は、草分けリネエジによって管理されている。新参リネエジは草分けリネエ

ジ(またはそれ自身そこから由来する別のリネエジ)から由来するとみられている。トラック諸島では一般的に財の贈り手は、それらに対して残存権を保留し、受手は(仮の)使用权をもつ。使用权を持つ者は残存権を持つ者に土地の生産物の一部を贈らなければならない。毎年の初物献上の行為もこれにあたる。そして、残存権を持つ者の許可なく、これらの財を他人に譲渡できない。例えば、土地区画が父から子供へ委譲され、これが数世代にわたって実施された場合、その土地の贈与を受けた各リネエジは、土地の贈与経路を逆にたどって、元々の土地保有リネエジに初物の献上を続ける。

この原則に従って、土地保有団体としてリネエジは、幾つかの土地区画に権利を保有するのであるが、土地区画の権利は重層している。地区に古くあるいは長らく定住しているリネエジが、一連の土地区画に完全なあるいは残存的な権利を保有し、新参のリネエジは保有する土地に使用权のみを持つ。

ところで、新参のリネエジが地区に族籍を持つのは、地区の土地区画に権利を保有することに基礎づけられている。通常、これらの土地区画に対する権利は、地区の首長リネエジ出身の、あるいはすでに地区に政治的に組み入れられているリネエジ出身の父からの贈与(*niffag*)として相続される。トラックでは母系リネエジの成員からみて男性成員の子供は *yefekyr* (コドモないし潜在的後継者)とみなされる。この点から見ると、地区を構成するリネエジは、始祖として「チチ」の立場にある首長リネエジからの父方的出自者である。新参のリネエジは地区の「チチ」に由来し、移住の新旧によって位づけされ、「コドモ」とみなされる。重層する土地に対する権利との関連で見れば、首長リネエジは地区の土地に対する残存権保有者であり、新参リネエジは使用权保有者で、前者に毎年初物を献上する。土地に対する残存権を持つ首長リネエジの成員補充が途絶えると、使用权を持っていた他の(*yefekyr*の立場にある)リネエジが地区の土地区画に完全な権利を獲得することができる。

トラック諸島および周辺離島では、土地保有の主体は母系リネエジないしはその分節であるが、共有される土地から採れた食物で養育された人がキンシップを共有するとみられていて、土地と血縁が概念的に混融されている。時によっては土地(=食物)の共有関係が系譜の共有関係を凌駕している。また、重層している土地に関わる権利と政治的地位との関連で見ると、次のように図式できるであろう。

首長リネエジ：新参リネエジ：残存権保有者：使用权保持者：親(チチ)：*yefekyr*
(コドモ)。

3. ラモトレック島³⁾

基本的な土地保有の主体は母系リネエジ（各リネエジはサブクラン内で位付けされる）であるが、ボガット(*bwogat*)とよばれる居住地と連結している。ボガットの文字通りの意味は一群の土地区画のことで、それらの区画の1つの名前で集合的に呼ばれている。通常、ボガットは1つまたは複数の家屋の建っている名前をついた土地区画とそれに近接・分散した幾つかの土地区画で構成され、これらすべての土地区画はまとめて「某ボガットの土地」とよばれる。ほとんどの場合、これは母系リネエジが統括する土地区画である。個人の第一次的な族籍は、彼が相続権を持ち人生のある時期に居住していた土地区画にあり、個人は「某ボガットの人」とよばれる。このようにボガットは、土地とそれを保有する人にも適用される言葉である。個人は彼が忠誠を示すリネエジの年長者の名前をあげるか、ないしは某ボガットの成員であると名乗ることで、自己が所属しているリネエジに同定される。ラモトレック島でも居住地とリネエジは緊密に連結している。屋敷(*bwogat*)はリネエジの拠点であって、クランやサブクランのレベル以下の系譜的に関係する人々が「ボガットの人」と表現される。

土地に関する権利との関連で、リネエジからの分節集団の分立あるいはリネエジの消滅に目を向けると、リネエジの拠点である土地区画は残存権が保有されている土地であり、これを保有するリネエジのすべての土地の中で最高のランクの土地である。さて、世代が経過し残存権を保有していたリネエジが絶滅に至ると、土地の再分配がなされ、あるボガットは無住になったり、リネエジから分節した系統に管理される。通常、土地は最初に分節した系統に受け継がれ、これはやがて独立したリネエジに成長する。他方、分節系統がリネエジが残存権を持たない土地に移住するのは、父から贈与された土地ないし養取で贈与された土地への場合である。ここでも、土地の使用権を贈られた系統は残存権を保有する贈与側のリネエジに、葬送やカヌー小屋の改造などの機会に不定期的な貢納(*poliwan*)をする。そして土地を贈られた集団の成員は、当該の土地に居住していたり、権利が認められている間は、贈与側のリネエジに婚入できない。

ラモトレック島では、土地とランキングとの連結の萌芽を見ることができる。過去においてはクランのランクとこれらの首長クランが統括する土地の面積は比例していた。さらに首長のボガット(居住地)は *erao* とよばれる。*erao* は首長権と結び付いている古いリネエジの屋敷である。現実の首長はサブクランの別のリネエジから選出され

3) 資料は Alkire [1965, 1974] によった。

たかも知れないが、継承権の第一は *erao* のリネエジにある。最高首長は *Fairochekh* ボガットから出てくるが、島の最高位の土地はこの屋敷ではなく、*Lamitakh* である。最高首長が命令を出す際に、*Lamitakh* からの言葉として表現される。また、*Saur* クランは絶滅しているが、このクランがかつて保持していた *ochang* 職は他のクランに委譲されず、*Saur* の土地に居住している、あるいはそこを統括しているクランの一人がこの職を遂行しなければならない。ここでは土地、親族と政治的地位が地区政治において連結している。首長クラン (*tamollihailang*) の権威は、クランの全員ならびにクラン財を使用している非成員（クランのボガットに妻方居住婚で居住していたり、クランのカヌー小屋を使用している姻族、クランの土地を贈られ、定期的に貢納している者）に及ぶ。

4. オレアイ環礁⁴⁾

基本的にラモトレック島と変わらないが、ここでも首長クランと平民クランの違いは、移住の新旧に従い、クランは元来特定の土地と結合していた。基本的な土地保有の主体はリネエジ (*gailang*) である。リネエジの土地は幾つかの土地区画から構成され、最も重要な土地は居住地区で、これはリネエジの拠点とされている。居住地区はリネエジの拠点ないしはそれに付属する区画である。言い換えれば、リネエジの拠点とそこに付属する土地区画がボゴット (*bwogot*) を構成し、ランクのある土地の名前で表現される。例えば、「E土地区画はOボゴットについている」などである。ここでもリネエジとその拠点とみなされる土地区画とは連結している。

土地とか果樹の贈与は、これらの財に対する完全な権利の委譲ではなく、贈り手は残存権を留保し、受け手は重要な儀礼などにおける島布やヤシ縄の献上を通じて、象徴的にこの権利を認知する。仮に受け手がこれらの献上を怠ると、与え手は土地や樹の使用を禁じ、場合によっては使用権を回収する権利を行使する。

環礁では人口の減少によって、リネエジの成員が絶滅に至ると、他のクランに土地を委譲することになるが、他方において、土地を放棄せずに養取や非公式に居住している者を組み入れることで、延命をはかる。あるボゴットに永住が許された者は親族集団に組み入れられ、真の系譜関係があるかのごとく、権利と義務が認められる。

オレアイ環礁でも、家屋や建造物はリネエジの拠点と同定される土地区画に置かれていて、これに付属する土地区画と共に財産単位を構成する。リネエジが基本的な土

4) 資料は Alkire [1974] によった。

地保有単位で、居住を共にする成員が労働集団を構成する。このようにカロリン群島では *locality* が政治構造のみならず親族組織においても重要であるといえよう。

女性の移動を伴わない妻方居住婚社会では、土地保有の主体として母系リネエジがおおきく変形されることなく機能しているといえる。だが、成員の増減に対応して、親族の改編が常に行なわれてきた。他方、男性成員は他に婚出する構造であるので、自己の族籍を同定するリネエジの根拠地として、特定の居住地が意味を持ってくる。これが、数軒の建物群とそれに付属する土地区画からなる屋敷であり、そこに産まれた人々の族籍を示す処である。これはボガット系の言葉でよばれている。このように土地にからまる諸権利で構成される団体として母系リネエジが機能している。この意味で、*locality* が系譜関係を凌駕してくる余地がある。

草分けの首長リネエジに対する、後続ないし分節リネエジによる初物の定期・不定期の献上行為は、かつてのまたは最近の土地贈与者として留保している残存権を、土地受贈側として使用権を保持している者が確認することを意味しており、特定の土地に重層している諸権利と政治的地位との連結を示すといえよう。

補. マーシャル群島⁵⁾

上述の諸点はマーシャル群島にもあてはまる。マーシャルでは土地区画 (*wato*) は首長の保有するところで、彼らは土地区画を使用する者を指名する権利を持つ。ここでもトラックと同様、土地の与え手は残存権を持ち、受け手は使用権をもつ。残存権は第一次的な権利である。この土地に関する権利の関係は、政治的には残存権保持者が首長 (*irooj*) で、使用権保持者は *alab* という。土地権保有の主体は、母系ないし疑似母系リネエジ (*bwij*) であるとみられるが(マーシャルでは *bwij* は母系と範疇化されているが、現実には疑似母系的——uterine-cognatic ambilineality——である [SHIMIZU 1987: 39])、特定の土地区画 (*wato*) に建てられた家 (*em*) を媒介として機能している。家はそれが建っている土地区画の名前で示される。*bwij* は特定の土地に使用権を保有していることで存在が認められる。

人は土地に対する残存権、使用権とならんで、他の土地で労働する権利をもつ。彼らは土地の労働者 (*ri jermal*) とよばれる。*ri jermal* の権利は、広く *alab* の親族関係者に認められている。*alab* は *bwij* の年長者で、*bwij* が使用権を持つ土地区画のマネジャーで、彼の下に、その土地でコプラ生産などの労働をする *ri jermal* が存在

5) 資料は Pollock [1974], Shimizu [1987] によった。

する。

ここでは土地に対する残存権を保有する首長、使用权を保有し労働者を監督するマネジャー、そして土地で働く権利をもつ労働者に分れる。各土地区画には、幾人かの労働者を統括するマネジャーがいて、彼らが首長に責任を持つ。首長は土地区画を委譲したり、再分与できる力を持ち、使用权を統制し、新しいマネジャーや労働者を指定する。彼らは土地から採れたコプラの数%を税金として受け取り、土地のパンノキの初物の献上を受ける。

Ⅲ. 夫方居住婚社会

1. ウリシー環礁⁶⁾

ウリシーの土地保有団体の構成は、母系出自の強調と夫方居住婚の規制によって定められる。土地保有の主体はハイラン (*heilang*) とよばれる (疑似) 母系リネエジである。各ハイランは、付与されている政治的職能やリーフおよび無人島の統制に関する権利の継承と並んで、土地をめぐる諸権利の主体である。それぞれのハイランは幾つかの土地区画とタロイモ田の区画を保有すると共に、密集村落の一面に伝統的な居住区を持ち、ここに各ハイランの中心となる屋敷がある。ここでは夫方居住婚が採用されているので、ハイランの女性成員は他のハイランの家屋に婚入していく。ただし、密集村落であるのでハイランの成員間の交流は容易である。ハイランの長 (*tamol*) に任命された年長者はハイランの中心の屋敷に引き移るのを原則とする。この屋敷はハイランの中軸で「ハイランの家 (*imwel heilang*)」とか「首長の家 (*imwel tamol*)」とよばれる。ここでは家屋は石積みの土台 (*daif*) に建てられるが、この *daif* は家屋が消滅した後も残り、その上に家屋を再建するのが通常である。ハイランの居住区は定められているが、人は父方・母方双方の関係をたどって *daif* を使用しているので、必ずしもハイランの成員で構成されているわけではない。だが一貫しているのは、ハイランの長である年長者が居住するのが「中軸の屋敷」で、何らかの理由でそこに家屋が建てられていなくても、その屋敷跡は「中軸の屋敷」として留保され、屋敷の持続性が維持されている。

この居住区と並んで重要なのは、特定の特権が付与されている土地区画である。モグモグ島では「*hafalak* の土地」とよばれる一定の数の土地区画がある。最高首長の許

6) 資料は牛島 [1983, 1987a] によった。

に献上される魚・亀の儀礼的分配に際して、この「*hafalak* の土地」を保有するハイランは、魚・亀の特定部分を分配される特権を持つ。また、場合によっては無人島の統制権が付随している。さらに幾つかの「*hafalak* の土地」は特定の職能 (*matang* 職) と連結している。これらの土地区画はハイランから原則として離れない、他のハイランに贈与することのない土地区画であって、ハイランの長が統括する。

このようにハイランは土地保有団体であるが、このハイランの成員構成とその補充の様式を検討してみよう。基本は母系リネエジであるが、リネエジの成員の減少・消滅に至ったハイランは、父方関係を通じた編入によって成員を補充する。逆に増加傾向を持つリネエジは、他のリネエジに侵入していくことになる。母系の出自者による成員の補充が困難になると、父方関係を通じた成員補充が採用されることになるが、一時的または中間的に父方関係者を取り込むことで、ハイランの再編成がなされた後は、再び可能なかぎり母系の出自を強調する傾向を持ち、母系出自を持続させようとする傾向がみられるからである。だが、別の選択として *tamol* 職の父系的継承の傾向を中心に、土地の相続様式において、父系を強調する方向にむかったハイランも存在する (以上、モグモグ島)。この結果、個人は場合によっては複数のハイラン、父方と母方のハイランに、さらには養取先のハイランに、二重、三重に帰属することになる。このような機構を通じて、母系の成員が減少・絶滅に至ったハイランが土地保有団体として維持される。この結果、今日、モグモグ島のハイランの構成成員は、母系成員37.6%、母系男性成員の子供17.6%、母系男性成員の娘の子供20.6%、父系をたどる成員31.2%、である。

ハイランの構成はハイランが統制している土地区画、タロイモ田に対する権利と連結している。ここではハイランが統制する土地区画やタロイモ田を利用・使用している、あるいはその資格を持つ「ハイランの人」は、「土地の人 (*chal bogat*)」とよばれている。この「土地の人」の範囲には母の関係者のみならず父方関係者も含まれている。土地との関連でいえば、個人は父方の土地をよく世話し、樹を植え、畑として開墾し、手を入れるのが適切な行動であると考えられている。母方の土地は婚入した女性の子供が守っていることになる。だが、土地を適切に世話せず、父方関係者と仲が悪くなると、父のハイランの土地から追い出される。

「土地の人 (*chal bogat*)」はハイランの土地を使用している人を意味するのであるが、底流には母系出自の強調が保持されている。「ハイランの人」の中の母系成員を *togokh* というのに対して、父方関係者は「男から出た来た者 (*rol mal thoho*)」とよばれ、前者が系譜的に優越する。 *togokh* がいなくなると、 *rol mal thoho* が成員として

組み入れられる。この男性成員の子供が成員として繰り込まれた後は、再び女系が強調される。また、父方から受け継いだ土地区画やタロイモ田を使用している人、および将来父のハイランの土地を使用する子供は、父のハイラン（母系関係者）の葬送に当たって、特別な贈与（*mogos*）を献上しなければならない。贈り手がこれらの土地、タロイモ田に対して残存権を留保しているからである。ここでも土地に関する権利をめぐって、男性成員の子供（使用権保有者）から女系成員（残存権保有者）への象徴的な財の献上という慣行に遭遇するのである。

ウリシー環礁では、母系をたどる出自原理と夫方居住婚の組み合わせ、成員の増加、減少、消滅という変動に対応して、土地保有団体としてのハイラン（疑似母系リネージュ）の成員構成はこみいった構成をとる。つまり、土地保有団体としてのハイランの維持のために、親族の恒常的な改編が促されているといえよう。その際に母系男性成員の子供が潜在的な成員として考慮され、個人の多重的帰属が容認される。他方、ここでは特定の土地区画がある種の特権や職能と連結している点が重要である。さらに成員が分散していく夫方居住婚社会におけるリネージュの拠点としての「軸的な屋敷」の生成も注目される。

2. フェイス島⁷⁾

土地保有の主体は、ボゴタ（*bogota*）とよばれる男系的居住集団である。このボゴタ（屋敷）は名前を持つ（島に36ほどのボゴタがある）。政治的序列は、土地つまり位付けされたボゴタに内包されている。ボゴタに付随している地位は固定していて、ボゴタの保有者によって保持される。場合によっては個人は2つの地位を受け持ったり、誰かの名義で遂行することもある。これらの高い位の職能が付随しているボゴタは *matanga* とよばれ、屋敷は *yarawu* といい、通常の屋敷（*dyife*）と区別される。さらに、特定の専門職や儀礼的知識も特定のボゴタに振り当てられている。ボゴタは父系的に相続・継承され、男はボゴタに留まり、男の職能は特定のボゴタと連結している。

ボゴタ（屋敷）は典型的に男系男性で構成され、彼らは妻と子供と共に、1軒から5、6軒の家屋群をなして村落内の名前を有する土地区画に住み、炊事小屋、墓地そして内陸の耕地を共有する。ボゴタは父系的に継承され、安定したものである。だが、近年では人口減少と外部への移住によって幾つかのボゴタは無住となってしまっているが、先住者の関係者がいて、これらのボゴタを先住者の名義で管理している。

7) 資料は Rubinstein [1976] によった。

各ボゴタは「永久の土地」と「入ってきた土地」という二つのカテゴリーの土地を保有している。280の土地区画のうち、171（61%）が前者で、残りの109（39%）が後者である。後者はこの20年から30年の間に5、6回の取引を経て、ボゴタからボゴタへ移動した土地である。

これらの土地区画が委譲されるのは、婚姻と養取においてである。婚姻時に妻の近親者が数区画の土地を夫に贈る。これらの土地区画は夫の近親者に分配される（「女性によって持ち込まれた土地」）。そのお返しに夫の親族は、贈られたのと同量区画の土地を、作物が植えられるように下ごしらえして贈ったり、単なる土地区画を贈る。妻の親族はこの土地から一定のシーズン収穫できる（「畑を作るための土地」あるいは「妻が持ってきたものと交換する土地」）。妻方は土地を、夫方は労働を贈与するわけである。この妻が持ち込んだ土地は、妻の家族が夫の家族に、彼女の子供達を養育し住まわせることの懇願を表わしているという。離婚に際してもこの土地は夫のボゴタに留め置かれるが、子供がいない場合は、稀ではあるが妻のボゴタに返却される。また、妻が妊娠中ないし病気で死亡すると、夫は妻のボゴタに土地を贈る（「血の支払い」）。養取に当たって、養取の成立の象徴として土地が交換される。これらの婚姻、養取、妻の死に際しての土地の交換は、土地交換の85%をしめる。

ここで母系的要素を検討しておかねばならない。フェイスでは、母系クランはアーカイブな概念にすぎず、母系の出自は組織原理として少しの役割しか果たしていない。土地保有の主体は父系的なボゴタに取って代わられてしまっている。人は島への最初の移住者からの母系出自をたどるが、異なった父系ボゴタの系列を媒介にしてたどる。この動きは、それぞれのボゴタへの航海である、と表現される。だが、土地の委譲についてのフェイス島人の説明に、母系的要素がみられる。それによると、現実には女性によって持ち込まれた土地は、必ずしも子供の財として夫のボゴタに保留されないで、交換の一環として他のボゴタに与えられてしまうのだが、「女性が彼女の子供に土地を伝える」と説明されている。また、第一子の誕生、夫の葬送の最後の儀礼などに当たって、妻の家族から夫の家族に一連の食物が贈与される。この含意は夫のボゴタに子供が留まっていられることの願望を表現することである。これらの慣行の底流には、子供と父のボゴタとの関係はある意味で構築されるものであるのに対して、母のボゴタとの関係は所与のものである、という考えがみられる。

ボゴタの「永久の土地」と「入ってきた土地」との区別は絶対的なものではないが、男の子供に与えられる土地と女の子供に与えられる土地との差異と関連する。フェイス島人の説明によると、娘には「永久の土地」を委譲し、最近「入ってきた土地」は

息子に与える、という。「入ってきた土地」は娘の婚出に際して夫のボゴタに与えられないし、「血の支払い」として妻のボゴタに贈与される土地として使用されることはない。フェイス島民によれば、子供は権利を侵犯されることのない土地を母から受け取ってれば、母の死後、ボゴタの土地をめぐる紛争に際しても土地を失うことはない、という。かくて、女の移動に伴なって委譲される土地は、娘の婚姻に際しての委譲であれ、夫のボゴタで彼女の子供が使用するための委譲であれ、彼女の死に対する賠償として妻のボゴタへの委譲であれ、「永久の土地」の破られることのない取引でなければならない、とされる。この女性に与えられる土地は「永久の土地」でなければならないという考えは、「永久の土地」は常に同じボゴタに連結していなければならない、という島民の別の考え方と反律する。

ここでは、「永久の土地」といっても、委譲が古い過去になされて、その取引が忘却されてしまった土地は、ボゴタの「永久の土地」に繰り込まれてくる。検証できるのは、娘に委譲された土地は、取引がなされた記憶がない土地であるということにすぎない。ここにフェイス島人の考え方が示されている。すなわち、土地、財、人のすべては回遊する、とみなされている。そしてあるものは早く、あるものは遅く回遊する。土地区画は幾度か委譲を繰り返して、最後には元の保有者の手に戻ってくる。男性は土地に対して責任を持ち、土地を管理し監視し保有する。だが、女性は居住しているボゴタに付随している土地で働くので、現実には土地を保有するのは女性である。母系的に委譲される土地の所有権は侵犯されることがない、という考えに関連して、島人は、人は父のボゴタから追放されることがあっても、母のボゴタから切り離されることはない、と確信している。

さらに、ここで姉妹とその女系子孫が、その生家のボゴタの土地に対して兄弟とその出自者よりも強い発言権を持っている点を特記できる。これは変形クロー型の親族名称にも反映している。姉妹の女系子孫は、数世代にわたって、彼女の生家のボゴタの土地に対して残存権を留保しているとも解され、生家に住んでいる母方のイトコに対する発言権を保持している。父のボゴタに居住する権利は、年長者やボゴタ出身の女性の子孫によって剝奪されることがあっても、母のボゴタへの居住権は犯されることがない。これらの考えは、幾つかのボゴタはこの200年あまり絶えることなく父系的に継承されているという系譜上の証拠からもいえる、ボゴタは父系出自集団と一致する、という表明と反律するのである。

フェイス島の場合で注目されるのは、父系のボゴタが土地保有の主体に転換してい

る中で、底流に潜む母と子供の切り離されることのない結合という、基本的な母系のイデオロギーが、土地の委譲をめぐる観念に残留していることである。さらに特定の職能、技術がボゴタ（屋敷）と連結している点である。これは火山島のヤップの事情とすこぶる類似した様相を示している、このフェイス島の様相はヤップ島の影響を受けたものなのか、あるいはウリシーフェイスーヤップの連続体として理解すべきなのかが問題である。

3. ヤ ッ プ 島⁸⁾

ヤップ島の土地保有の主体は、父系的に継承される屋敷 (*tabinaw*) である。タビナウは屋敷、家屋さらにそれを構成する人々を指し示す。「タビナウの人」は「ひとつの土地の人」の意で、タビナウの土地と結び付いている人を意味している。土地区画の中で、石積みの土台 (*dayif*) のある屋敷地が重要である。人は、石積みの土台に住んでいると信じている祖霊の近くに可能なかぎり家屋を再現しようとする。さて、タビナウは食料資源保有単位でもあって、石積みの土台には、タロイモ田、ヤムイモ畑、漁場、ヤシ林、山の土地区画が一つのセットとして付随している。タビナウは一つの財産単位を構成している。

ヤップ社会の基盤は土地、とくに屋敷地であって、土地に力があるといわれている。屋敷はランク付けされ、職能が付与されている。人は屋敷を相続・保有することを通じて、屋敷に付随している土地区画とランクおよび職能を受け継ぐ。ここでは土地が主体で、土地保有者は「土地の声」を話す。このように、タビナウは石積みの土台に付けられている名前で示され、タビナウの保有者は、その土地に付与されている職能と権威を受け継ぐ。

タビナウは男系でつながる成員とその配偶者で構成され、最年長の男が土地の管財人で、成員はそれぞれ割り当てられて土地に使用権を持つ。タビナウの土地に住み、土地に対する権利を持つものが「一つの土地の人」なのである。これらのタビナウの土地は一つのセットとして年長の男からその兄弟、ついで息子へと受け継がれる。

タビナウへの成員権は、各屋敷に保留されている一群の祖先の名前の一つを名付けられることで始まり、男子の場合、いずれその屋敷に帰属している土地に対する権利が分与されることが予定される。だが、父と子供の関係それだけで、土地相続の保証にはならない。父と息子の関係は「世話の交換」といわれている。子供は父に対して

8) 資料は Labby [1976], Lingenfelter [1975], Marksbury [1979], Schneider [1984], 牛島 [1987b] によった。

尊敬と従順を示し、奉仕し、老後の世話をする。他方、父親は幼い子供を世話し、指導し、教授する。慣習を守り、父親を世話した息子に、土地が与えられる。逆に子供が父に対して不従順で、慣習を守らない場合は、土地に対する権利は与えられず、タバノウから追放される。ここで強調されるのは、父と子供の関係は「世話の交換」を通じて構築される関係であることである。ヤップでは一般的に父を表わす *chii tamagin* には、人を養育し、土地を世話し統制する人の意があり、子供を表わす *fak* には、世話される人、あるいは他の人が統制している土地ないし資源で養育される人の意がある。

タバノウとは別に各人は、母系 *sib (ganong)* に帰属する。これは母一子関係を基本にしている。これと関連して、子供からみて母の生まれた処は、リケガル (*lik'egal*) 「ガル樹の根元」という。ガル樹は大きく四方に枝を広げ、その枝が大地に垂れ下って根を生やして、そこからまた新しい樹が生じて、広がっていく。同様に女性はタバノウに生まれて、別のタバノウへ婚出し、その土地に子供を産み、その子供がまた広がっていく。ここに女性は他のタバノウに嫁にいて、そこに根を降ろして、子供を産んで、その子供が成長して、その土地の主になる（新しい樹になる）、といったイデオロギーがみられる。強調されているのは、母一子の結びつきで、これは生得的な関係である。

さて、男性の土地が自己が生まれたタバノウにあるのに対して、女性の土地は「足の処にある」という。女性はあちこち歩いていて、落ち着いた先（婚入したタバノウ）に土地がある。さらに女性はいった先で土地を「釣る」ともいう。女性は婚出先のタバノウでの土地の使用権を得るだけでなく、最終的に土地を自分の子供のものにするのが肝要なのである。ところでタバノウの土地は、その先代の先祖たちが労働（マガル, *mageal*）を投下してきた土地である。このようなものには「骨」がある。マガルに対してはマガルで報いなければならない。これを「骨を切る」と表現する。「子供の母は土地の骨を切ら」ねばならない。女性の夫およびそのタバノウに対する貢献は性的奉仕と労働奉仕（土地の耕作と調理など）である。ヤップでの生活は男女の分業の統合で成立するが、それを媒介するのが交換である。夫に対する妻の貢献、父親に対する子供の貢献が、「土地の骨を切る」ことであり、「世話の交換」なのである。これらの行為を通じて女性の子供の下に土地が入ってくるとみられている。

ところで、女性の土地は「歩いていて釣った土地」であるが、女性のもう一つの土地は「母の乳房の土地」、彼女が産まれたタバノウである。ここは彼女の兄弟ないし兄弟の子供が居住し守っている。兄弟の子供からみて父の姉妹はマフェン (*mafēan*)

とよばれる。マフェンは、兄弟が保有していた土地を受け継いだ兄弟の子供及びその母に対して、監督者であると同時に保護者である。この地位は女系的に継承される。子供からみて母の夫（父）の姉妹およびその女系子孫がマフェンである。マフェンに対しては尊敬と従順を示さねばならない。兄弟の子供が不敬で慣習を守らないと、マフェンは彼らをそのタビナウの土地から追放することができる。他方、マフェンは儀礼的交換にあたって、集積財が優先的に分配され、タビナウの祖霊 (*thagith*) はマフェンのいうことなら聞いてくれると信じられており、誕生、名付けなどに際して霊的祝福を与えてくれる。

婚出した姉妹は、生家のタビナウに居住している兄弟に対してギライ、つまり家屋をささえている四隅の柱、とよばれ、儀礼的交換の際に最も大量に物資を調達してくれる存在であり、兄弟の妻と彼女の子供に対しては保護者であると同時に監督者である。このマフェンの地位と権限は彼女の子供、さらに娘の子供へと女系で継承される。

女性とタビナウの土地との関係を、ヤップ人の考えにしたがってまとめてみると、女性は婚出して、夫のタビナウで子供を産んで、その土地を自らの子供のものにする。だが、そこには夫の姉妹がマフェンとして、彼女および子供に対して、監督する権限を持っている。他方、自分が産まれたタビナウの土地は、他から婚入してきた女性の子供が受け継いでいて、他人のものになっている。だが、彼女はそのタビナウのマフェンとして、そこに居住している者を監督している。かくて、二つのタビナウに関して、女性の立場から見ると、「自分の土地は他人の土地、他人の土地は自分の土地」と表現される。

ヤップ島では、土地とタイトルが連結しており、財産単位としての屋敷は、特定の職能、ランクと連結し、屋敷の祖霊の名前を媒介にして、「父」-「子」で引き継がれていく。この父系的なつながりで屋敷筋の連続が保持されていくかのごとくである。だが、その底流に、他のタビナウから来た女性が、夫及び屋敷に対する貢献を通じて、土地を子供に受け継がせるといふ、母-子の関係が強調される。この様式はフェイス島で見たのと類似した様相を示している。

このヤップ島の土地を基盤にした構成は、決して独自の様式と見るべきではなく、カロリン群島に共通する、土地と血縁の融合、土地と称号との連結、夫方居住婚社会に見られる父方親子関係の累積とその底流に根強く保持されてきた母系関係との構造的妥協などの諸要素の組み合わせから構成された、と理解される。ただ、フェイス島の様相はヤップ島からの影響を考えるべきであろう。

4. ベラウ島⁹⁾

ベラウ島の土地保有の単位は *telungalek*、母系リネエジである。この *telungalek* は特定の屋敷と連結している。屋敷は屋敷地、タロイモ田、森の土地区画、聖地で構成され、タイトルと職能が付随している。これらの屋敷の数は固定しており、どの集団がこの地位を占めるかは、時間の経過に応じて異なる。

ここでは土地は常に人によって占拠されるものとされている。ベラウ島の各リネエジはそれぞれの移住の歴史を伝えていて、*telungalek* はある女性が特定の場所の土地に対する権利を獲得することで創始された。土地は戦争、政治的な策略、首長への特別な貢献などで獲得されたりしたが、通常は姻族間の交換を通じて獲得される。土地と血縁の連結が重要で、特定の土地が保証されると、移住を共にしてきた関係が固まり、血の繋がり土地に対する権利の共有の観念が融合する。土地に対する権利の獲得に成功した移住者は、血縁集団として、そして居住地に付随しているタイトル保有者として、ベラウ人としての同一性を獲得する。

この土地と血縁の融合の内質は、母を通じて受け継がれていく。母系の成員であることは同じ内的な本質を共有することを意味している。母が産まれた処、ないしはリネエジが生成された処は、血縁を通じて受け継がれた同質性を象徴する。そこは、女性が子供を産むために帰る処、死後還る処で、死んだリネエジの成員はそこの屋敷で埋葬され、母系リネエジの男の長が祖霊を世話し、成員の病気や危機に際して招霊する。

ベラウ島においても、称号は土地と連結している。土地を保有したリネエジが、この土地区画に引き継がれてきた称号、ランクおよび職能を獲得する。ベラウ人によれば、人はやって来て、立ち去るが、土地と土地の名前は留まり、決して変わることがない。リネエジの称号保有者に選ばれた男（ここでは女性が男の長を選び、場合によっては殺害する権利を持つが、リネエジの財の管理に関しては男性が大きな権威を持っている）は、この称号が付属している土地区画（屋敷）に移る。彼専用のタロイモは位のついた役田から採れる。称号とランクを保留しているのが土地であって、この土地区画に居住することに選ばれた男が、リネエジ全体を代表して発言する権利を獲得する。彼はこの土地に住んでいる間、称号を保持し、リネエジの財を管轄する。この職にある間、彼は、リネエジの成員に相談することなく、リネエジに属する土地や貴重品を売ったり、貸し出しできる。

9) 資料は Smith [1981, 1983] によった。

母系リネエジは土地を通じて称号を保有できるのであって、集団の長は公的な称号として土地の名前を使用する。ベラウの貴重品と同様に、このような称号とタイトルが付随した屋敷の数は限定されている。このような首長の称号が付随している土地は、母系リネエジの成員（女性の子供）に相談することなしには委譲されることはない。この屋敷が集団の同一性と存在の基盤であり、リネエジの骨なのである。

これらの土地を基盤とするリネエジ (*telungalek*) は、母系の成員で受け継がれていく。したがって女性成員の子供 (*ochell*) は男性成員の子供 (*ulechell*) より強い。*ochell* が土地保有集団の基礎である。リネエジは「一つの家 (*blai*)」にたとえられ、*ochell* は家の四隅の柱といわれる。彼らは土地を獲得することで「一つの家」を生成した女性からの出自をもつ者であるからである。女性成員の子供（男）が、土地、貴重品、称号、そして女性成員と子供たちに対する権威を持って、「家」を統括する。

ベラウ島では、貴重品と土地の獲得をめぐる交換が重要である。各リネエジは土地を離さないで留保しておく努力をする一方、交換を通じて土地の獲得に努める。他の財と同じようには土地は循環しない。食物や貴重品は、ベラウ全島を集団から集団へと、土地の獲得をめぐる循環する。貴重品や土地の獲得は主に姻族間の交換を通じてなされる。ベラウ島は夫方居住婚社会であるので、女性は夫のリネエジに婚出し、そこで耕作し、調理し、性的奉仕をする。子供も父の屋敷に食物や労働を提供する。そして、これらの貢献に対する「延べ払い」的な代償として、父のリネエジから貴重品や土地の委譲を期待する。夫と妻、父と子供の関係は交換関係で成り立っている。ここでは女性は「貨幣の道」として、彼女の兄弟のために夫から多くの貴重品や土地を得てくることが期待されている。このビジネスに成功した女性は自分のリネエジでのランクと発言権を向上できる。

父と子供の結び付きは所与のものではなく互恵的な交換の関係である。子供は父の許にいて労働している間は、父が保持ないしは使用している土地に居住する。父がその母方に帰還していたならば、居住はそのリネエジの処である。父の死後、父のリネエジが彼を繰り込むことに決めた場合は、父のリネエジの土地が居住地となる。そうでなければ子供は母方に居住するか、彼の奉仕に対する報酬として得た土地に居住する。

このようにベラウ島でも土地とある種の称号、職能、タイトルが連結している。ここではタイトルの付与されている土地に人が移動し、その職能を遂行する。これらの屋敷の数は限定され、夫方居住婚社会であるので、男性成員の子供がリネエジの土地

で働き、そこを維持し、女性成員の子供は他のリネエジの土地で働く。また、子供が父の屋敷に居住し続けることもあって、2, 3世代にわたって父から息子と引き継がれる例も見られるが、基本は母系リネエジが特定の土地を基盤にして健全に機能している。この点は母系原理が沈潜してしまっているヤップ島と異なる。ペラウ島では姻族間の「交換」が強調されて、労働と性的代償として夫方ないし父方から貴重品と並んで土地が委譲される。そして、ここでも母系原則にしたがって、母と子供（従って、母を共有する兄弟姉妹）は所与の関係であるのに対して、父と子供は交換と互惠の関係で構成されている、とみなされている。

西カロリン群島の夫方居住婚社会では、母系成員が分散し、女性は夫の居住地に、男性は父の居住地にあって、それぞれ他のリネエジの土地に使用権をもつ。このためリネエジの本拠地としての中軸の屋敷が意味を持つてくる。ここはリネエジの土地を統制するリネエジ長の居住する役宅である。ウリシー環礁でみたように土地保有の主体として母系リネエジが機能している処でも土地区画とある種の特権の連結がみられる。この傾向はペラウ島になると特定の屋敷と称号、職能との連結が強化されるとともに、この屋敷が集団の同一性の基盤として重要な意味をもつ。この傾向は、土地保有の主体としての母系リネエジが背後に消えてしまっているのに替わって、家族集団・屋敷が前面に登場しているヤップ、フェイス島にいたると、一層促進される。ここでは屋敷と称号、職能が連結し、親族に基盤を置いた人間関係が、土地に基盤を置いた人間関係に転換している。この家族、屋敷の自立性の高まりに対応するかのようになり、累積的な父一子関係が土地の相続などの局面に生じており、母系は沈潜している。

だがしかし、母と子供は所与の関係であるのに対して父と子供は交換を媒介して構築される関係である、母の屋敷での居住権は侵犯されることがない、女性が子供に土地を伝える、あるいは母を媒介にした土地の相続、といった母系のイデオロギーが底流に強く潜んでいる。そして、母系は沈静しているが、姉妹とその女系子孫が、生家の土地、ないしそこに居住している兄弟の子供に対してある種の権限を留保している。

Ⅳ. ま と め

カロリン群島では、locality が親族集団の組み立てにおいて重要である。

中央カロリン群島の妻方居住婚社会、ここでは女性が移動せず、男性が移動する社

会であるが：

1. 母系リネエジは土地にからまる諸権利との関連で構成され、その根拠地として特定の居住区と連結している。
2. この土地保有団体は、人口の増減に対応して成員の恒常的改編が促され、時によって土地を共有する関係が血縁を共有する関係にまして強調される。
3. 基本的にはリネエジ創立の新旧および長幼の順に従って、称号・タイトルの順位が決められている。だが、土地に対する権利の重層性との関連においては、島に最初に移住した首長リネエジがすべての土地に対する残存権を留保し、後続リネエジは土地受贈側として使用权を保有し、前者は初物を享受する特権を持つ。ここに土地に重層する権利と政治的地位の連結を見ることができる。
4. 父の集団から彼の子供の集団への土地の贈与は、使用权の委譲であって、父の集団はこれらの土地に対する残存権を留保している。

西カロリン群島の夫方居住婚社会、ここでは男女とも成員は分散し、男性は父の居住地に、女性は夫の居住地にて労働するが：

1. ここではリネエジの拠点としての軸的な屋敷が意味を持ってくる。この屋敷と称号、タイトルの連結がみられる。
2. 土地保有の主体としての母系リネエジに替わって、家族・屋敷の自立性が高まり、それに対応する形で土地相続などにおいて父子関係が累積されてくる。
3. それに伴って、血縁に基盤を置いた関係から土地に基盤を置いた関係に転換する傾向がみられる。
4. 土地保有の主体としての母系集団の沈潜化にもかかわらず、母系のイデオロギーは根強く保持されている。父と子の関係が交換を媒介にした構築される関係であるのに対して、母と子の関係は所与の切り離されることのない関係である、子供は母の土地から切り離されることはない、土地は母の労働を媒介にして伝えられる、とみられている。
5. 母系の沈潜にもかかわらず、兄弟姉妹の関係は堅く、姉妹とその女系子孫が、生家の土地ないしその土地を使用している兄弟の子供に対する監督権を留保している。¹⁰⁾

10) 本稿で触れなかった類型的考察および人口増加とそれに対応する食料資源の確保法との関連については、本論集の須藤論文（第2章）において考察されている。

参 照 文 献

- ALKIRE, W. H.
 1965 *Lamotrek Atoll and Inter-Islands Socioeconomic Ties*. Illinois Studies in Anthropology 5, Urbana: University of Illinois Press.
 1974 *Land Tenure in Woleai*. In H. P. Lundsgaarde (ed.), *Land Tenure in Oceania*, Honolulu: University Press of Hawaii, pp. 39-69.
- GOODENOUGH, W. H.
 1951 *Property, Kin and Community on Truk*. Yale University Publications in Anthropology 46, New Haven: Yale University Press.
- LABBY, D.
 1976 *The Demystification of Yap*. Chicago: University of Chicago Press.
- LINGENFELTER, S. G.
 1975 *Yap: Political Leadership and Culture Change in an Island Society*. Honolulu: University Press of Hawaii.
- MARKSBURY, R. A.
 1979 *Land Tenure and Modernization in the Yap Islands*. Ph. D. dissertation, Tulane University.
- MARSHALL, Mac
 1972 *The Structure of Solidarity and Alliance on Namoluk Atoll*. Ph. D. dissertation, University of Washington.
 1976 *Solidarity or Sterility? Adoption and Fosterage on Namoluk Atoll*. In I. Brady (ed.), *Transactions in Kinship*, Honolulu: University Press of Hawaii, pp. 28-50.
 1981 *Sibling Set as Building Blocks in Greater Trukese Society*, In M. Marshall (ed.), *Siblingship in Oceania*, Ann Arbor: University of Michigan Press, pp. 201-224.
- MURDOCK, G. P. and W. H. GOODENOUGH
 1947 *Social Organization of Truk*. *Southwestern Journal of Anthropology* 3: 331-343.
- POLLOCK, N. J.
 1974 *Landholding on Namu Atoll, Marshall Islands*. In H. P. Lundsgaarde (ed.), *Land Tenure in Oceania*, Honolulu: University Press of Hawaii, pp. 100-129.
- RUBINSTEIN, D. H.
 1976 *An Ethnography of Micronesian Childhood: Contexts of Socialization on Fais Island*. Ph. D. dissertation, Stanford University.
- SCHNEIDER, D. M.
 1984 *A Critique of the Study of Kinship*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- SHIMIZU, A.
 1987 *Kinship-based Groups and Land Tenure on a Marshalllese Atoll*. In E. Ishikawa (ed.), *Cultural Adaptation to Atolls in Micronesia & West Polynesia*, Tokyo: Committee for Micronesian Research 1985, Tokyo Metropolitan University, pp. 19-41.
- SMITH, D. R.
 1981 *Palauan Siblingship: A Study in Structural Complementarity*. In M. Marshall (ed.), *Siblingship in Oceania*, Ann Arbor: University of Michigan Press, pp. 225-273.
 1983 *Palauan Social Structure*. New Brunswick, New Jersey: Rutgers University Press.
- 須藤健一
 1984 「サンゴ礁の島における土地保有と資源利用の体系——ミクロネシア, サタワル島の事例分析」『国立民族学博物館研究報告』9 (2): 197-348。
 1985 「ミクロネシアにおける母系制社会の変質——トラック語圏社会の出自集団の構成」『国立民族学博物館研究報告』10 (4): 827-926。

牛島 中央・西カロリン群島における土地・血縁・称号

牛島 巖

- 1983 「西カロリン群島・ウリシー環礁社会における土地保有集団——母系・夫方居住婚社会における親族集団構成」『歴史人類』（筑波大学歴史・人類学系紀要）11: 80-128。
- 1987a 「ウリシー環礁モグモグ島の集団構成——カロリン群島の母系・夫方居住婚社会における土地保有集団」牛島 巖編『象徴と社会の民族学』雄山閣出版, pp. 9-36。
- 1987b 『ヤップ島の社会と交換』弘文堂。